

# 戀はヤハラカニ・ワツラフ（一）

勝 田 耕 起

はじめに

室町時代の古辞書によれば、「恋（戀）」という漢字にはコヒ、コフ、オモフといった訓の他にワツラフ、ヤハラカニ、ナイガシロ、コロスといった付訓がなされている：【図1】。本稿はそれらのうち、特に「ヤハラカニ」に着目して、このような漢字の本来の意味とは関係のない訓が漢字と結びつく過程を検討し、古辞書の性質の一端を明らかにしようとするものである。

## 1 ヤハラカニ・ヤハラグという訓をもつ漢字と字形

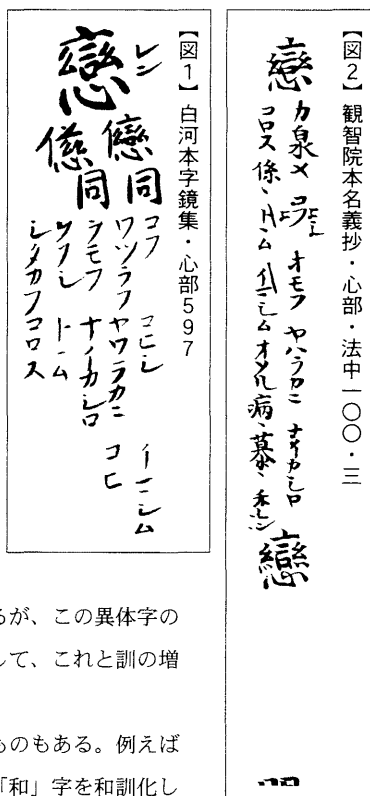
ヤハラカニという和訓と「戀」との結びつきは、観智院本類聚名義抄まで遡る：【図2】。

観智院本名義抄には異体字が多く収録されているが、この異体字の字形が異字間で類似する場合には、これと訓の増加との関係を探ってみたい（注1）。

掲出字には、和訓がなく漢文注のみ付されたものもある。例えば【図4】の「和、（也）」などがそうだが、この「和」字を和訓化して、後続の本でヤハラカニの他に動詞ヤハラグが付訓されることも起こりうる。

そこでまずは、広くヤハラ（和）系の和訓の付された漢字を確認した。

ヤハラカニという訓を持つ漢字は観智院本名義抄に「戀」も合わせて10字ある。ヤハラカナリという訓は47字、ヤハラグは24字に存する。これらの中には「戀」字と字形の



似た「變 (シヨウ)」と「變 (ヘン・変)」とがあるので、以下これらの字形と訓について詳細に見ていこう。

1-1 「變」の異体字

ヤハラカニという訓のついた「變」字は【図3】。掲出字が俗字(谷)、「變」が正字(正)と読める。そこで次にこの正字の「變」を観智院本名義抄で探すと、図4のように

和訓は無いが「和也」という義注が得られる(ただし図3では正字と注されていた形が、図4では俗字と注記されている)。「和」は色葉字類抄でもヤハラカニ・ヤハラクの第一掲出字である：【図5】。黒川本しかないところだが、二卷本(下巻一上、ヤ・人事、p. 300)も同じ。図のように「和・柔……變……[註+火]……已上和」という記述であり、38字も掲出しながら、「恋」字は含まれない。また、図書寮本名義抄の「恋」字の和訓は「コヒシ」(出典表記は白氏文集)しかない。つまり「戀 ヤハラカニ」という訓は改編本名義抄の編集(転写)の過程で加わった可能性を考えねばならないのである。

この「變」字についてさらに異体字を探すと【図6】のように火部にある。ここの注記では漢字の下部を「又」に作るものが俗、「火」につくる掲出字の二つが正、ということ図4の注記とほぼ一致する(注2)。すると、図3の正字注記が誤りである可能性が考えられる。

図の3, 4, 6により異体字のありようをまとめると、図4のように漢字下部の「又」と「火」が通用になる場合と、

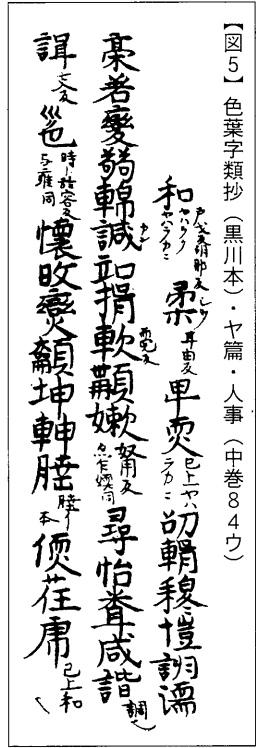
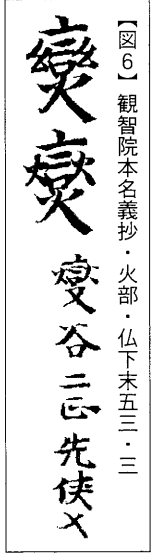
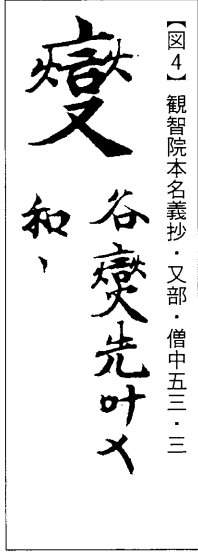
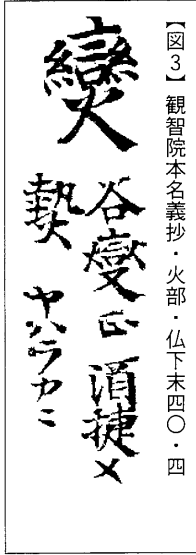


図6のように漢字上部の「爰」と「火」が通用になる場合とがあることが判る。そして図6と図3の掲出字がいずれも「變」の異体字であることから、「爰」と「糸」が通用ということも判る(図2の「戀」も同様。「爰」が主掲出体で、「糸」は和訓も字体注記も付されない異体字)。つまり漢字下部は2通り、漢字上部は3通りのバリエーションがあるので、理論的には6通りの形が想定される。実際、図3, 4, 6にて示されるのは以下の4通り。★1は観智院本名義抄に見出せないもの。★2の字は、「變」ではないものが存在する。

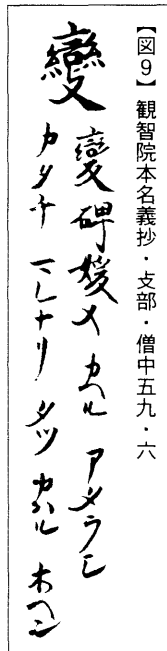
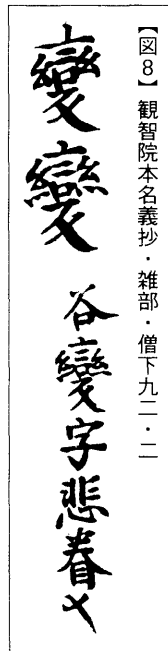
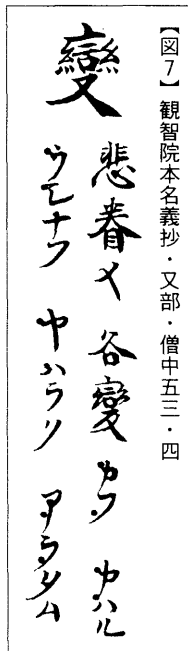
【表】「變」字の異体字構成と字体注記

下部 \ 上部	火言火	爰言爰	糸言糸
火	図4 (正)、図6正	図6正	図3俗
又	(図3正)、図4俗、図6俗	(★1)	★2 (俗)

1-2 「變」の異体字

★2の組み合わせの字は【図7】の掲出字である。和訓を確認すると確かに「ヤハラグ」とあるので上表にまとめた「變」異体字群の一種かとも思われるが、反切注記は明らかに「ヘン」、字体注記には「変(變)」の俗字とあり、和訓も「カフ・カハル」である。「変」字が上表のような異体字群からの類推で誤認されてヤハラグという訓を取り込んだものと考えるのが妥当だろう。

なお「変」字の異体につ



いては他に【図8】【図9】があり、図7の掲出字 [糸言又] の正字は [爰言反] なので、図9の [糸言支] 字には正俗の注記が無いけれども、割書きされている同じ「爰」

型が正字で、掲出字が異体字と考えられる。図8は掲出2字に俗と注され、同じ字[繚+反]が正字の位置に再び記されているのでここは明らかに誤りである。正字の扱いが異なることについては、図8が反切のみで付訓がないこと、従来「乱雑不体裁」（岡田希雄『類聚名義抄の研究』1944, p. 307）と指摘のある雑部の記述であることなどから、今は図7、9の記載内容に従っておく。

### 1-3 誤認・錯入の可能性

さて1-1の表のように、漢字の上部要素・下部要素にこれだけのバリエーションがあって、すべて「變」と認識されていたとすると、★2 [繚+又] まだがその同類と誤認され、「変」の異体字の和訓に「變」の和訓が紛れ込むということは十分に起こりうる。これと同じように、「恋」字の和訓の中に「變」字のヤハラカニが混入したのではないだろうか。

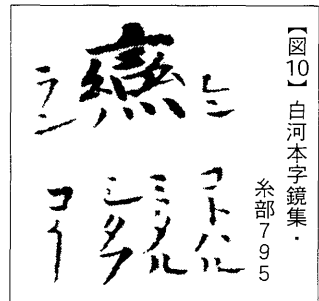
この種の指摘はすでにあつて、中村宗彦1979には名義抄転写段階における問題訓のうち字形の酷似による誤読の例として「怒 オモハカル」（「怒」字の訓の誤記）ほか6例を記している。また中村1987では字形近似字誤属例と称して「敗 ヒサク」（「販」字の訓の誤記）ほか上記とは別の11例が挙げられており、現象としては類例をいくつも確認することができる。ただ、「戀」に関しては、「幺」と「糸」の相通はあるものの、漢字下部の「心」と入れ替わるもの、すなわち「変」字の異体字群における「反一又一支」のような関係を見出さなければ、図3, 4, 6に示した「變」の異体字と“似ている”と言えそうもない。しかしそれは名義抄に見られない。そこで次に、別の古辞書を参照してみる。

## 2 字鏡集における「戀」の近似字

時代は下るが、白河本字鏡集（二十巻本、室町中期写）に【図10】のように漢字下部が「灬」のものが見られ、本来なら「灬」＝「火」であるから図6の上の字と同じもののはずだが、和訓には「シタフ」「コイ」があるので「恋」字と認識されたと考えられる。この例から、下心が「灬」を介して「火」と混同されるという筋道が想定でき、

戀 ⇔ [繚+灬] ⇔ [繚+火] ⇔ 變

という四者における3つの接点が一応確認できた。ただし、字鏡抄・字鏡集の他の本

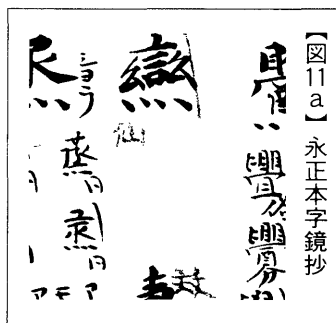


(永正本、龍谷大学本、天文本、寛元本、応永本)では、この「𤑔」形のレンは和訓の無い形で火部の最後の方に掲載されている場合が多い。そして永正本【図11a】と龍谷大学本【図11b】と天文本【図11c】では合点が付されている。天文本字鏡鈔六冊は標字排列の異なる初原本(韻目順、第三冊～第五冊)と改編本(字形類似順、第一冊、第二冊、第六冊)の取り合わせ本であり(山田1967)、前者韻目順の部首の内部も注記形式によって第一群・第二群・第三群に分けられる。図11cはまさにその初原本系部分の第一群であり、そこで付された墨の合点については貞苺1967が次のように言及している(p.140):

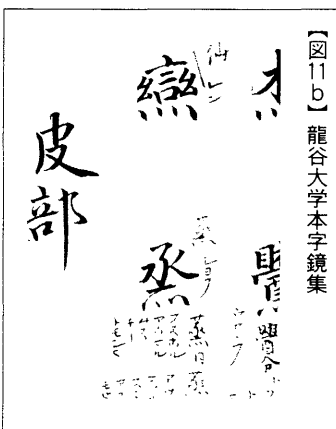
全般的にこの群の標字には奇字が少なく、普通使用される文字が多いのであるが、廣韻などくらべてみると、それに出てこない文字、あるいは偏旁冠脚を誤って編入したと見られる文字もまま見ることができる。そしてそれらには墨の合点を付したものが多い。(注3)

上記はあくまで傾向として述べられたものだが、少なくとも、部首を代表するような漢字—「熊」「無」「然」「照」などに合点が付された例は無く、前田本色葉字類抄のそのような、用字の一つの基準となる重要なもの(和訓に対応する漢字)に付されるものではない。むしろ素姓の怪しさを注意するマークと言える。また、寛元本(注4=【図11d】狩谷斎校訂本)では5段組で規則正しく配列してある中に、この字だけ余白に6段目として追加で押し込まれたような記され方がなされている。

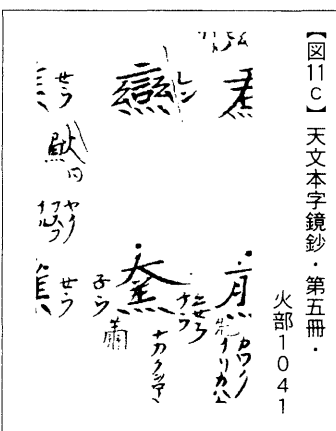
このような記載態度は、そのままこの字のインフォーマル性を示すものと考えられる。



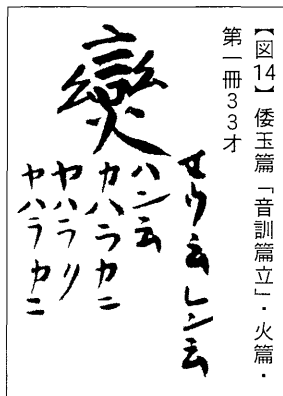
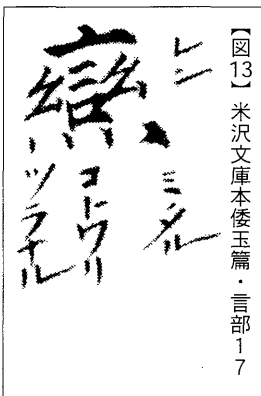
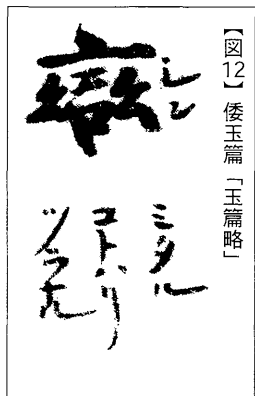
【図11a】永正本字鏡抄



【図11b】龍谷大学本字鏡集



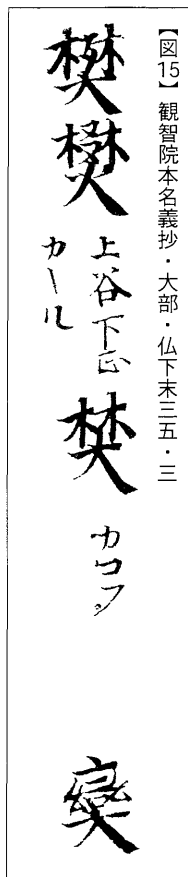
【図11c】天文本字鏡鈔・第五冊・火部1041



### 3 倭玉篇における「戀」の近似字

倭玉篇諸本では、「玉篇略」（1532年写）の言部所収字「𤑔」に「ミタル／コトハリ／ツラナル」という訓が付いた例がある【図12】。これは言部の後ろから数えて25字目に記されているが、これが米沢文庫本倭玉篇（室町末～江戸写）のほぼ同じ場所、すなわち言部の後ろから26字目（「謨」字の前後）には、「𤑔」が同じ訓をもって掲載されている：【図13】。部首としての「火」あるいは「灬」は所属字の多い独立性の強いもので、図13の形ならば、通常は灬部に収められてしかるべきものである。「𤑔」は「龍龕手鑑」などにもあり、3つの和訓は漢字の意味どおりのものが付されていると考えてよい。よってここは「𤑔」の誤写（玉篇略と直接の関係があったかどうかはともかく）とみて間違いない。しかしながら、なぜ誤写が起こったのか、なぜ他ならぬ「灬」が書き加えられたのか、といった面からこの事象を考察してみる必要はあろう。ひとつの可能性として、この「灬」の付いた形が正俗という典拠のたどっていける異体字意識とは別に、非常に世俗的な通用字体として存したということが、前節の合点表示と合わせて考えられるのである。

【図14】は室町末期写の倭玉篇「音訓篇立」（注5）で、図6の掲出字となっていた、「變」の異体字である。字音表記として、

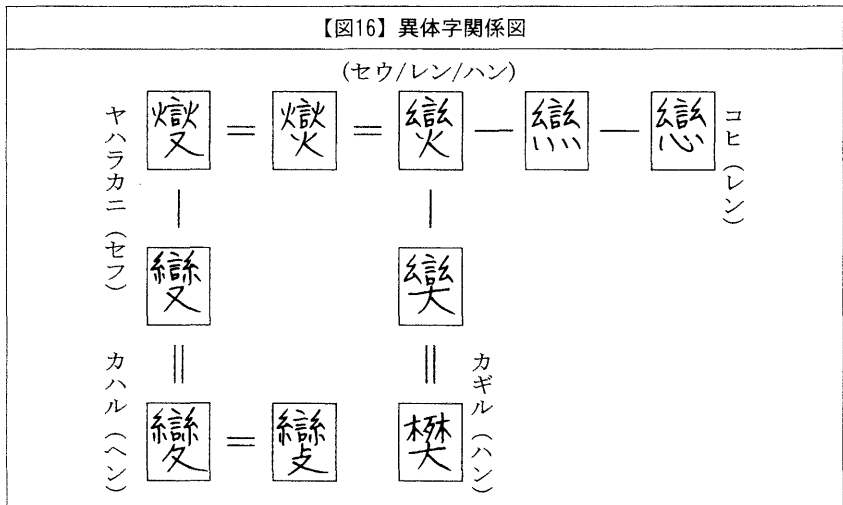


セウのほか「恋」の字音と同じ「レン」が記されている点は注意すべきで、これは図10の【𠂔𠂔+心】(音レン・訓コイ)との接点とみなすことができる。また、字音の「ハン」は「樊」字の異体字と認識されたことによるものだろう。名義抄に【図15】のような文字の並びがあり、前田本色葉字類抄でも樊字はカギルとカコフの両方の項目で掲出されていることから、3文字目【林+大】も上の2文字の異体字で、4文字目の注記の無い字まで異体字と認識されていたと考えられそうである。そしてこの訓の付されていない一番下の字は上に述べた世俗的な通用字体の可能性があり、これが結果的に、たまたま図14の字と酷似したために図14の字音ハンが生じたということである。

漢字の体系において、確固とした弁別的な形をしているのは標準字形である。ところがその標準字形のそれぞれが変異を生じるとき、その別字の変異同士が似るということはある。そして標準から離れている分だけ漢字と音訓の結び付きも強くないため、混同が起こるのである。

#### 4 まとめ

以上のような漢字同士の形の類似性・異体字意識をまとめて図示すると【図16】のようになる。文字間の「=」記号は古辞書掲出字の注記として正俗が記されているもの、またはそれに準ずるもの。「—」記号は音訓に共通点がある、字形が似ている、というつながりを表したものである。







## 参考文献

- 犬飼守薫『『類聚名義抄』—観智院本と蓮成院本と—の「雑」部の比較対照(上)(中)(下)』『椋山女学園大学研究論集』8号第2部(1977)、9号第2部(1978)、13号第2部(1981)
- 貞苺伊徳1967「注文から見た字鏡抄・字鏡集の考察」『本邦辞書史論叢』山田忠雄編、三省堂
- 田村夏紀1997「観智院本『類聚名義抄』と『龍龕手鑑』の正字・異体字の記載の比較」『鎌倉時代語研究』20
- 中村宗彦1979「類聚名義抄の疑問訓」『訓点語と訓点資料』62
- 中村宗彦1980「観智院本『類聚名義抄』補訂試稿」『訓点語と訓点資料』64
- 中村宗彦1987「類聚名義抄和訓の定位」『国語国文』56-9
- 中村宗彦1983『九条本文選古訓集』風間書房
- 西原一幸1992「改編本系『類聚名義抄』・『龍龕手鑑』にみえる「或」および「或作」の字体注記について」『日本語論究2』和泉書院
- 山田忠雄1967「字鏡抄と字鏡抄」『本邦辞書史論叢』山田忠雄編、三省堂
- 山本秀人1985「改編本類聚名義抄における文選訓の増補について」『国文学攷』105
- 吉田金彦1977「類聚名義抄の和訓の研究法」『国語国文』46-4

## 引用字書

『類聚名義抄 第一巻』(観智院本) 影印, 風間書房1954、『類聚名義抄 第二巻』観智院本仮名索引・漢字索引, 風間書房1975; 初版1955、『図書寮本類聚名義抄 本文影印 解説索引』再版, 勉誠出版2005; 初版1976、『色葉字類抄 研究並びに索引 本文・索引編』風間書房1964、『尊経閣善本影印集成 19 色葉字類抄 二 二巻本』八木書店2000、『字鏡抄』7帖(永正本), 古辞書叢刊, 雄松堂書店1974、『字鏡集 白河本 影印篇』勉誠社1977、『字鏡集 寛元本 影印篇』勉誠社1978、『字鏡集 天文本 影印篇』勉誠社1982、『龍谷大学善本叢書 8 字鏡集 上・下』思文閣出版1988、『尊経閣善本影印集成21~24 字鏡集 二十巻本』4冊(応永本), 八木書店1999-2001、『玉篇略』3帖, 古辞書叢刊7, 雄松堂書店1976、『古辞書音義集成15・16 音訓篇立 上・下』汲古書院1981、『倭玉篇五本和訓集成』本文篇(米沢文庫本) 汲古書院1994、『異体字研究資料集成 一期別巻二』雄山閣出版1973

(本学准教授)